

史料館蔵津輕家文書「青森勤番並同所御蔵廻御締方見聞言上書」について

工 藤 大 輔

はじめに

史料館蔵津輕家文書の中に「青森勤番並同所御蔵廻御締方見聞言上書」(以下、「言上書」とする)という史料がある。この史料は文政四年(一八二二)に発覚した「相馬大作事件」の密告者である嘉兵衛の出訴をきっかけとして、野内関所を通行して津輕領内に入れ込んできた南部者に関して青森勤番・同所御蔵廻御締方見聞御用のために青森に居た早道工藤千蔵と高木半右衛門による弘前藩家老への報告書である。

以下に、「言上書」を紹介するとともに、若干の検討をおこないたいと思う。

一 「言上書」の紹介

- (包紙) 一 文政四辛巳年五月三日
- (裏書) 一 上

謹而奉言上仕候御事

私共青森勤番并同所御蔵廻御締方見聞御用被仰付相勤罷有候処、

於同所二色々取沙汰御座候二付、私共申合見聞之上其度々御用書ヲ以御家老中^正相達候趣左ニ奉言上候、

一、先頃於平内ニ仙台出生嘉兵衛と申者色々之儀ヲ訴訟仕候由ニ付、弘前表^正御引上ケ被仰付候由、然処右嘉兵衛と申者南部三戸ニ暫刀鍛冶職と仕罷有候由之処、其後城下盛岡^正引越右職渡世之処、元来右嘉兵衛儀殊之外奸智之者ニ而右職分之者共ニ被相拒、双方野心ヲ挟ミ、既仲間内より被追払候様成ル仕儀合ニ相成、他領者丈城下ニ住居不相成、同所立退キ候者ニ御座候由、然処外商売方と違ひ家士出入も仕候職方之儀、左候得者南部家中者勿論、同国在町之者共迄常々此方様御儀悪さまニ申触罷有候処より家中之内何歟咄ニ而御不和之体ヲ承り、此度自身之置所無之、内心色々取巧ミ平内^正參忠功之体ニ申上、弘前・黒石辺ニ住居仕度存念之処より南部表ニ而常々咄合之処^正枝葉ヲ付色々之儀ヲ申上候ものニも御座候哉、尤右嘉兵衛と申者前書之通殊之外奸智之者ニ御座候由、尚又南部表ニ而此方様悪さまニ申触候儀者常之事ニ御座候由、尤右等之儀者諸人推慮咄ニ御座候哉、右嘉兵衛申分実正ニ御座候哉、虚実曖々相分不申候得共、密々専之風聞ニ御座候由見聞

仕候御事、

一、右見聞之趣四月廿四日付御用書ヲ以御家老中^江相達申候御事、

一、南部五戸之勘助・兵七、右兩人真綿式拾兩代計持参、四月十九日野内口より入来、青森諏訪宮社司方^江止宿仕候処、翌日より同所見世方^江真綿壳渡候由之處、兩人共斤量之目ヲ一切不知体、尤當時相場より過分下直ニ而若筋之品ニも御座候哉と商人共買受不申候者も御座候由、随而町役共ニ而段々様子見聞仕候処、全ク以真綿壳杯ニ者無御座、何分間者之様子ニ相見得申候由、尚又右之者共弘前表^江罷上り候由同所町役共より内意申出候御事、

一、右見聞之趣四月廿四日付御用書ヲ以御家老中^江相達申候御事、

一、昨廿四日付御用書ヲ以奉申上候、青森より弘前^江参候南部之真綿壳五戸之勘助・兵七と申名前ニ而、去ル十九日野内口より入来、同廿二日弘前表^江参候由、尤右勘助と申者南部八戸之虚山と申薦僧ニ而、兵七と申者南部盛岡山岸町関兵助倅ニ而同国家中ニ相違無御座候由、尤真綿式拾兩代計持参青森ニ而九兩代計壳払、残り弘前表^江持参仕候由同所町役共より内意申出候御事、

一、昨廿四日、仙台水沢之武次右衛門・万右衛門・喜七、右三人野内口より入来、青森目明シ千吉方^江参候得共、右千吉と申者逢候而者目明シ仲間之儀何被頼候而も六ヶ敷相成候由ニ付、此節弘前^江罷越留主之旨相断、千吉家内ニ而同所米町若狭屋要右衛門と申者宿ヲ頼止宿致せ置候得共、如何ニも不審成ル様子ニ付同所町奉行^江内意訴候由、随而町役^江被申付内々見聞仕候由、然処右武次右衛門と申者者南部盛岡之目明シ、万右衛門と申者者南部家中ニ而

喜七と申者者右万右衛門家来ニも可有之由、右何れも南部城下より参候者共ニ相違無御座候由、然者何用事ニ而参候哉之旨町役共ニ而無何と相尋候処、向之者目明シ千吉手之者と見受候哉、私共相尋候者有之罷越候、南部より参候と申候而者故障之筋御座候間、何分仙台水沢之者之由ニ向々御尋等も御座候ハ、御咄被成下候様、尚又若シヤ今十助様・山田左九郎様弘前表より参居不申候哉之旨見聞ニ参候町役^江相尋候由ニ付、近頃者一向参不申旨咄合仕置候由ニ付段々様子見聞仕候処、何分用向間者ニ無相違相見得候由、然共右之者弘前^江参候様子無御座候得共、前書奉申上候真綿壳杯も南部^江罷歸り候由ニ而出切手紙申受青森出立、野内口^江者参不申弘前^江参候由ニ付、右武次右衛門手三人共ケ様之術テニ而又々弘前^江参候も難計候由、左も無御座候得者、青森ニ止宿之内悪者共ヲ遣ひ弘前之様子相窺候儀并先ニ参居候者共^江諸事通達仕候而、先頃平内より御引上ケ之盗取候手段等取巧ミ之程難計候由同所町役共内評之由内意申出候、尚又前書真綿壳并此節青森ニ止宿罷有候南部盛岡之目明シ武次右衛門并万右衛門・喜七、右三人も何分間者ニ無相違相見得申候間、右之趣弘前表^江も罷上り今十助^江相達可申と奉存候、尤前書万右衛門儀者南部家中ニ而奥通り之役柄と相見得申候由青森目明シ千吉より内意申出候、尤右注進方之儀ニ付千吉只今弘前^江参候由共申出候御事、

一、右見聞之趣四月廿五日付御用書ヲ以御家老中^江相達申候御事、
一、南部表ニ而何故之儀ニ御座候哉、此方様^江御敵対可仕之手配密々專ニ御座候由色々之風聞御座候ニ付、段々見聞仕候得共、内通

り者如何ニ御座候哉、表向者曾而左様之筋無御座候由、尤頃日青森間屋藤林源右衛門手代房之助と申者南部野辺地飛脚ニ参候ニ付、右之者呼寄せ同所湊口船々入津商売方并南部廻船積入方、其外同所中商ひ之仕様、尚又荷物駄送等之仕振迄得与相尋候処、常体ニ別而相替儀無御座殊之外穩ニ而罷有候由、尚青森表ニ而評判と違ひ盛岡より野辺地迄諸役人下り方一切無御座、随而同国馬門関所入切手杯者去々年頃迄御当国之者松前者之由ニ相断通路仕候得共、此度私儀も松前者ニ相断候処、同所問屋申分ニ者去年迄盛岡より役人罷下り居候ニ付敷敷仕候得共、左様ニ而者殊之外不弁利ニ付、以来之処随分津輕衆ニ而相通シ候、依而貴様青森より参候間、青森者と相断不苦候旨ニ而、右之通入切手紙申受出入仕候旨前書房之助申出候、尚頃日青森米町弥次兵衛と申者南部福岡^正用事ニ而罷越候処、此辺迎も前書同様ニ而別而相替儀も無御座候由、扱又近頃公儀御役人御通行ニ付、右諸家来之咄合ニ者南部領吉岡と申所先頃家数四・五百軒程焼失仕候由、其外城下より通り筋別而相替儀無御座候由、左候得者南部國中何之相替儀無御座穩ニ而罷有候様子ニ相聞得申候御事、

一、一昨廿六日、又々^{（前、以下同）}俳諧師兩人南部より入来、青森ニ而逗留仕罷有候、然処弥俳諧師ニ御座候得者、日本中何方より参候而も同所俳諧之者共ヲ相尋参可申之処、前書兩人無其儀追々弘前^正罷上り候趣ニ御座候間、青森町重立共并町役共得与様子相窺候由之処、別而右様之者ニも無御座、尚用事向も相知れ不申、尤南部盛岡侍ニ無紛レ相見得候由、左候得者是も決而問者之様子ニ相見得候由

ニ付、先達而平内より引上ケ相成候刀鍛冶此節右番人等御殿重ニ被仰付、御用心專一之事ニ御座候由、青森町之者共密々内評ニ而罷有候由之御事、

一、去ル廿五日付御用書ヲ以奉申上候仙台御領水沢之武次右衛門と申者、南部盛岡之目明シ藤田武右衛門と申者ニ而南部國中ニ而者目明シ之頭分ニ御座候由ニ付、南部家ニ而者大抵重キ用向ニ無御座候得者、他国^正出シ不申候由青森目明シ千吉申分ニ御座候、左候得者南部國中前書之通穩ニ而罷有候得者、先達而平内より御引上ケ之鍛冶色々之儀發言仕、弘前表^正御引上ケニ相成候儀南部家^正相聞得候処より、右等之間者入込候儀と取沙汰ニ御座候、尤南部目明シ同道三人ニ而青森^正参候節、同所之目明シ千吉并弘前目明シ今十助・山田左九郎相尋参候、其上追々弘前^正罷上り可申之模様ニ而罷有候、尤今十助・山田左九郎儀者全ク弘前之御家中ニ者無之、隣国目明シ仲間之様ニ常ニ偽リ置候由之御事、

一、目明シ仲間之儀者何国之目明シニ而も其仲間同士ニ被頼候得者、如何様之儀ニ而も内々打明シ申聞候ものニ御座候由、是者其道々之立前ニ而如何ニも防方不相成ものニ御座候由、左候得者此度青森之千吉去ル廿五日今十助^正内訴ニ罷上り候由、随而表向者格別内通ニ而大概之儀者打明シ可申哉、其上絶体之頼合等有之不得止事、右鍛冶盗出シ乃至者毒藥等相廻シ候儀取巧ミ之程難計、尤千吉并今十助・山田左九郎ニ而者右体之儀仕間敷候得共、前書頼合之処より悪者共之有家申聞候処ニおゐて者金錢を不厭悪者共ヲ以毒藥等相廻シ候様取巧之程難計御座候由、右等之儀者他国ニ而多

分有内之事ニ御座候由取沙汰見聞仕候、尤先頃より既七人之間者此辺より入込候儀、其外よりも数多入込候哉難計様子ニ相聞得候由見聞仕候御事、

一、弘前真教寺之本堂前ニ御絵堂と申堂御座候由、右堂守伊香久左衛門取世話仕南部盛岡ニ而分限相応成ル町家隠居ニ御座候由、是親族之者共より折々便り御座候由、別而之儀も無御座候由ニ御座候得共、此節柄之儀入込之間者止宿之程難計御座候由見聞仕候御事、

一、右見聞之趣四月廿八日付御用書ヲ以御家老中ニ相達申候御事、右之趣謹而奉言上仕候、以上、

五月三日

早道
工藤千蔵 (印)
右同
高木半右衛門 (印)

二 「言上書」の内容に関して

「言上書」の内容を簡単にまとめてみると、

①平内にて仙台出生の鍛冶職人嘉兵衛が色々と訴え出ることがあり、弘前へ連れていかれた。彼によれば、南部家中はもちろん、同国在方町人までもが弘前藩主を「悪さま」に申し触れているという。この嘉兵衛いうことの正否は分からないが、密々専らの噂ではあるという（四月二四日付で家老へ達する）。

②南部五戸の勘助・兵七の二人が真綿売りを偽り、四月十九日に野

内口を通過し青森諏訪宮社司方へ止宿する。翌日より同所見世方へ真綿を販売するが、二人とも「斤量之目」を知らず、また、相場より下値で売買することから商人たちはこれを買わない。そこで、町役たちが見聞したところ、二人は真綿売りではなく、問者のようであった。また、町役によれば、四月二二日に弘前へ行ったという。この真綿売りは、一人は南部八戸の薦層で、もう一人は南部家中であることが判明する。その後二人は弘前へ向かったという（四月二四日付で家老に達する）。

③四月二四日、仙台領水沢の武次右衛門・万右衛門・嘉七の三人が野内口を通過し、青森の目明千吉のもとを訪ねる。千吉は弘前へ行き留守ということにして彼の家内である米町若狭屋要右衛門へ止宿させることにする。しかし、この三人のようすが不審であるため町奉行所へ伝え町役が内々に見聞したところ、武次右衛門は南部盛岡の目明、万右衛門は南部家中で喜七はその家来であり、南部城下よりやって来た者であることが判明する。また、彼らが見聞の町役へ今十助・山田左九郎が弘前から来てはいないかなど尋ねることなどから問者ではないかと疑う。弘前へ向かうようすはないが、さきの真綿売りのように出切手を貰いながらも野内へ向かわずに弘前へ向かうか、青森に止宿の「悪者」を遣つて弘前のようにすをうかがっているかもしれない。さらには、弘前に先乗りしている者に指示して弘前に連れてこられた嘉兵衛を「盗取」かもしれないとの評判である。なお、真綿売りも含めてこれらは皆問者であるとみられるので、弘前へ罷上り今十助へ報告すべき

と千吉より申し出る（四月二四日付で家老に達する）。

④南部表にて弘前藩主へ敵対するための手配が密かに進められているとの風聞があるが、表向きはそのような気配はない。最近南部野辺地へ行った青森の間屋藤林源右衛門の手代によれば、ことのほか穏やかであったようである。しかし、馬門関所を通行する際にこれまでは津軽の者は松前者として通行していたが、去年から盛岡より役人が居るようになったため厳しくなり、以来青森者として通行できるようになったという。また、南部福岡へ行った米町の弥次兵衛、領内を通行した公儀役人の家来の話によっても南部表は何の変わりもないという。

⑤四月二六日、南部より俳諧師二人がやってきて青森に逗留する。

二人は同所の俳諧の者たちを訪ねることもなく弘前へ向かおうとするようであった。そこで、青森の重立・町役がようすをうかがったところ、南部の侍に間違いないとのこと。これも間者かもしれないので、弘前へ連れてこられた嘉兵衛への警備を厳重にした方がよいと、青森町の者が内々に評している。

⑥青森の目明千吉によれば、仙台領水沢の武次右衛門は、南部盛岡の目明の「頭分」藤田武右衛門であるとのこと。しかも、彼は南部家にて重要な御用がなければ他国へ出ることがないとのこと。南部の国中が穏やかであるとすれば、嘉兵衛が弘前へ連れて行かれたことが南部家の耳に入ったことにより、これら間者が入れ込んできたのだろうとの評判である。また、南部の目明が青森にやってきました際、青森の目明千吉、弘前の目明今十助・山田左九郎を

訪ね、その上追々弘前へ向かっている。ただし、今十助・山田左九郎には、弘前の家中ではなく隣国の目明仲間であると偽るよういつてある。

⑦目明仲間は、どこの国の目明に対しても頼まれればいかなることでも内々に打ち明すことになっている。これは、その道の建前となっており防ぎようがない。したがって、青森の千吉が二五日に今十助へ内訴に行っているのでおおよそのことは打ち明しているかもしれない。千吉などはしないであろうが、嘉兵衛の「盗出」もしくは毒薬などを廻すことなどの計略があるかもしれない。これまで七人の間者が入れ込んでいるが、このほかにも数多くの者が入っているようにも聞く。

⑧弘前真教寺本堂前の御絵堂の堂守が世話をしている南部盛岡で相應の分限の町屋隠居のもとに、南部より入れ込んだ間者たちが止宿しているかもしれないと聞く。

などと、仙台出生の鍛冶嘉兵衛の一件をはじめとして、南部表から間者と思しき者たちが野内を通過して津軽領内に盛んに入れ込んでいることが分かる。しかも、彼らによって嘉兵衛の「盗出」、もしくは毒薬が使われるのではないかと噂されている。また、青森・弘前の目明、そして南部の目明の「頭分」が自分の姿を偽り、「目明仲間」というほかの者では防ぎようのないネットワークを用いて諜報活動を行っていることも分かる。

嘉兵衛が出訴に及んだのは四月六日のことであるが、その後、四月二二日に野内町奉行から、

一、野内町奉行申出候、御関所近來格別往来繁く相成候ニ付御飾ニ御弓無之候間、御弓御飾之儀申出之十張早速御飾被仰付旨申遣之、という申し出があり、このころ野内を往来する者が非常に多かつたということが知られる。⁽³⁾真綿売りを偽った二人がここを通過して青森にやつてきたのは、まさにこのときであつた。

「言上書」は五月三日付で、四月二五ころまでの状況を伝えている。しかし、これ以降も南部からやつてくる者はおさまらず、五月一八日には南部福岡の新助が間者の疑いがかけられ、町同心付添の上野内関所より送り返されている。⁽³⁾町同心が付き添ったのは、「言上書」にみえる真綿売のように、出切手を受けながらも野内には向かわずに弘前へ向かつてしまうようなことがあつたからだろうか。

こうした者たちは、②⑤のように真綿売りであつたり俳諧師などとその姿を偽つて津軽領内に入れ込んできており、とくに商人体の者の関所の通行には警戒したようで、

一、三奉行申出候、先頃より弘前并青森表^上南部者色々外名目ニ而御関所罷通候趣相聞得候間、随而以来商人体ニいたし疑敷もの罷通候者与得相糺、御関所口より相返候様被仰付度奉存候、左候者碓ヶ関・大間越・野内町奉行^上被仰付候様、申出之通申付之、

というように、⁽⁴⁾疑わしい商人体の者については、取り調べの上送り返すように指示されている。しかし、南部表からは生国を偽り、さらには商人と結託して入れ込む者さえもいたようであり、藩庁は間者など見馴れない者については穿鑿の上申し出るよう指示している。⁽⁵⁾

このように、南部表より姿を偽り津軽領まで入れ込んでくるのにはど

のような理由があつたのだろうか。とくに、「言上書」の中でたびたびみられた「盗出」が懸念された仙台出生の鍛冶嘉兵衛についてみてみることにしたい。

三 仙台出生嘉兵衛の出訴

本史料の冒頭に出てくる嘉兵衛は、周知のように下斗米秀之進による弘前藩主襲撃未遂事件（相馬大事件）を密告した人物である。密告の理由は、

私儀南部出生御座候ハ、御好シミも無御座、御当家様^上御注進可申上筋ニ無御座候得共、仙台出所ニ而御座候間、係る太平之時節悪を去り善ニ付者人間之本意と奉存申上候旨申事ニ御座候、

というものであつた。⁽⁶⁾本名は喜七というが、南部を憚り嘉兵衛を名乗つたという。⁽⁷⁾彼は四月六日に狩場沢の番所に訴え出て、狩場沢などでの取り調べの後弘前へ連れて行かれることになった。弘前では和徳町の三国屋三九郎へ宿を申し付けられるが、三国屋は止宿の者が多く、嘉兵衛が見覚えのある者がいるかもしれないことを嫌い宿替を願ひ出ている。⁽⁸⁾嘉兵衛はこれ以前にも何度か弘前に出入りしていたか、もしくは「言上書」にあるように同じく南部表より弘前へ入れ込んでいる者がいて、彼らと出くわすことを警戒していたのかもしれない。その後、同町高嶋屋半十郎へ宿替となるが、出奔のおそれなどの理由から女性が入れ置かれている揚屋の一間に移されることになる。⁽⁹⁾

嘉兵衛の言によれば、この計画は、

一、兄弟子大吉儀、福岡下斗米秀之進之細工致し、同人屋敷之内^一

小屋懸、ホド相立鉄鞭・鉄扇、其外色々之道具細工仕罷有候処、

去秋より鉢之筋金并鉄玉之類弟子ニ不相知せ密ニ出来候様御頼ニ

付、怪敷思候得共出来申候由、其後右品如何様之御用ニ候哉と御

尋申候所、秀之進別間ニ被呼入大事之儀を相頼申度候承知呉候様

被仰候間、身分相応之御用等相勤可申旨御答申候所、間者相頼申

度候ニ付被頼呉候様被仰候ニ付、何御用ニ而御座候哉と申候所、

扱津輕様御下り之時節何頃に候哉、大館^二參候而承候様被仰候ニ

付、以之外之儀ニ奉存候得共御頼承知候上ハ難遁、大吉儀承知之

上右間者ニ大館^二罷越候、右參懸ニ私住所ニ大吉立寄密ニ申候者、

此度奉襲津輕様之儀者、去年御逝去之南部様御遺言ニ者此度之病

氣快ク候ハ、少将ニも可相成哉、津輕家ニ而も侍従に可相成専風

説ニ候、侍従之跡ハ四品、少将之跡ハ侍従ニ成可申旨、右等之儀

者私共之知る所ニ無御座候得共、少将ニ不被為成御逝去ニ付、右

之儀を被仰置候儀ニ御座候哉、(以下略)

というように、秀之進から間者として弘前藩主に対する諜報活動を依頼

された兄弟子の大吉から聞かされたという⁽¹⁰⁾。当時、嘉兵衛は三戸に居り、

大吉と相談の上今回の出訴に及んだという⁽¹¹⁾。一方、嘉兵衛と秀之進との

接点については、三月に湯治にことをよせ襲撃の場所を見聞に大館に來

ていた秀之進一行と出会っているが、

其節私も大館ニ居り合御同人者兄弟子之縁ニ而御覚申候間、御逗

留宿^二相伺候処懸御目申候、

あくまで兄弟子との縁によるものであったという⁽¹²⁾。

さて、嘉兵衛の密告をうけて弘前藩では、隠密を遣わして調査をさせ
る。左に隠密の報告を揚げることにしたい⁽¹³⁾。

仙台出生嘉兵衛事喜七訴出候ニ付、隠密差出候処申出之趣左ニ、

一、南部福岡之下斗米秀之進・花輪之閑良助并帶刀之者式人、花輪

之市兵衛外ニ福岡之者老入・南部小坂村之半七と申者之下人ニ荷

を背負せ、同所之武八と申者案内ニ而、四月廿三日明六ツ時頃秋

田領雪沢村之久太郎別家平吉と申者方^二罷越、乗馬雇度旨頼合之

由ニ候処、前書八人之者共紛ら敷様子ニ付久太郎方^二平吉より為

知候付罷越、右之者共様子見受候処、市兵衛・武八兩人者見知之

者之由、外六人者見知無御座由、然処翌廿四日南部福岡之定七と

申者秋田より帰国之節久太郎方^二立寄候ニ付、前書八人之者共之

儀咄合度候由之処、前段申上候通名前一々言聞せ候由、随而段々

見聞仕候処、右之者共ニ相違無御座候由、尤荷物之儀者傘様之物

木綿袋^二入明き俵^二入候由、右品之儀者秀之進所持之鉄炮ニ可有御

座候由定七咄合候由、

一、秀之進并良助、其外之者共大明神村と申所より馬相雇、大茂内^{シタ}

村迄罷越候由、尤大明神村より參候馬子ニ三四郎と申者并次左衛

門、其外女共三人參候由之処、前書八人之者共途中ニ而次左衛門

と申者ニ大茂内村より橋桁村之山^二之通り聞合、同所より何れも

歩行ニ而山道罷通候由之処、大茂内村山行之者見当候由、猶又明

き俵^二入候品者馬子之者ニ手を付させ不申、前書八人之者共計ニ

而取扱候由ニ付、弥鉄炮ニ相違有御座間鋪由、

⁽¹⁴⁾ 大明神村・大茂内村・橋桁村秋田御領ニ而、橋桁村者大館と碇

ヶ関之間ニ而御通筋より少シ脇ニ入込候村之由、

一、前書八人之者共秋田雪沢村より中派^{ミナセ}通、尤此所御番所御座候
二付、右之者共御番所^ハ者歌舞妓役者之旨断罷通候由、夫より橋
桁山辺迄罷越候哉、廿三日夜之内立戻り中派番所^ハ者断不申、間
道罷通南部小坂村迄罷歸り、同所半七方^ハ一宿いたし夫より大湯
と申所^ハ罷越候由、

一、右宿致候半七と申者之女房者花輪之市兵衛女房と姉妹之由、

一、秀之進・良助之先立致候小坂村之武八と申者雪沢村之久太郎知
り合之者二付、右武八を久太郎手を以引入可申と色々趣意を以武
八勝手ニ相成候儀有之趣ニ而久太郎遣シ様子窺せ候処、元来武八
儀者欲深き者故金ニ成る事之様ニ申入候処、暫ク致分別候得共一
端秀之進之先立致し金子式歩貴候而決而他言不致候様被頼、猶又
小坂村之肝煎平蔵と申者并半七よりも堅ク口留致置候様子ニ而、
如何ニも久太郎方^ハ參候儀者難相成旨及言訳候由、随而久太郎申
候者、其元秀之進・良助之先立ニ而何方^ハ參候哉之旨相尋候処、
釈迦内迄參候と申、又津輕^ハ秀之進・良助商ひ物致持參候二付、
先立ニ被頼參候共申候由、然者自分先立致し、猶又宿致し候半七
并肝煎平蔵よりも敵敷口留致置候儀故、久太郎方^ハ參候儀万一後
日相顕候而者及迷惑候儀を相考候様子ニ相見得申候、尤右之儀者
武八口堅メ被致候を同所之久左衛門と申者之女房安居候而久太郎
^ハ咄合之由、

一、此方より差出候隠密定七ニ逢様子相尋申度、雪沢之久太郎手筋ニ
而定七呼ニ遣候所、風邪ニ而參不申、尤用事向キ致推慮候と相見得

別紙返書參申候、

態々御状被下難有拝見仕候、愈御機嫌好可被成御座珍重之儀ニ奉
存候、小子無事罷有候、御安意思召可被下候、将又先頃者久々ニ
而懸御目誠ニ難有仕合奉存候、御手廻様^ハよろしく御礼奉願上候、
且又此度態々御飛脚を以被仰下、早速同道ニ而參上仕度奉存候得
共、先達而道中ニ而引風いたし、未タ棄用仕候得共全快に及不申
候、此度者參上仕兼御殘多奉存候、御用事之儀者何か相分不申候
得共、若哉先達而貴公様御宅ニ而津輕^ハ一見之御咄合ニ御座候かと
拙者推量罷有候、其一儀ニ御座候ハ、毛間内領小坂村勝助子共御
尋被成候様、外ニ花輪町市兵衛と申者と右兩人道々案内者ニ御座
候、此者御尋可被成候、外ニ中派御番所ニ而御尋可被成候、先達
而貴公様御咄合ニ者福岡下斗米秀之進・花輪町関良助、外ニ下人
參候由之御咄ニ御座候、道々毛間内通り風聞ニ者右之御人方ニ相
違無御座候様子ニ御座候、右旁御報申上候、如斯御座候、以上、

五月初日

定七

工藤久太郎様

向々隠密申出書之内

一、大館と碓ヶ関之間之内白沢と橋桁と村合纒ニ隔候間ニ東方樹木
黒ク茂り山之体奥迄人形相見得不申場所ニ付、此所若も喜七申出
候様成儀共出来候ハ、乍恐随一御太事之場所ニ奉存候、
一、四月十九日、碓ヶ関口入候喜助・七兵衛と申者兩人之内、七兵
衛と申者侍風之者之由、喜助と申者ハ南部福岡之目明シ、定七
と申者弘前^ハ為見聞參候儀ニも可有御座候哉ニ相聞得申候、

右者隠密より申出候荒増ニ御座候、以上、

五月

このとき、隠密として派遣された者を特定することは難しい。しかし、弘前藩では嘉兵衛の出訴を受けた後、四月二二日に諸目付・早道・目明などを大勢仰せ付け、碇ヶ関折橋辺りの山中に小屋を掛けさせて早道・両目付・マタギの者十人に見張りをさせている。¹⁴このことから察するに、この隠密も早道・目明といったような者であったと思われる。この隠密は、雪沢村の久太郎を通じて南部福岡の定七への面会を試みている。この面会が「言上書」にいう「目明仲間」のネットワークによるものであったとするならば、この定七も目明であった可能性が高い。同様に、定七が秋田からの帰国の際に訪ねた久太郎もこのネットワークに位置づけられる者であったと考えられる。久太郎は秀之進一行の中でも市兵衛と小坂村の武八を知っている人物である。市兵衛は花輪の商人伊勢屋市兵衛で、秀之進らの案内役を務めた人物である。¹⁵市兵衛のような商人の存在は、さきにもみたように、問者が関所を通行する際に商人と結託して入れ込む場合があったように欠くことのできない存在であったようである。

むすびにかえて

「言上書」は、嘉兵衛の出訴によって弘前藩主の襲撃計画が発覚したことにより、早道を通じて不審者の通行を調べさせたものである。これにより、問者と思しき者たちがさまざまな姿に身を偽り領内に入れ込ん

でいること、しかも、「目明仲間」という領域を越えた彼ら独自の情報ネットワークの一端を垣間みることができた。

藩当局は、こうしたネットワークの存在を「是者其道々之立前ニ而如何ニも防方不相成ものニ御座候由」としながらも、一方では、彼らの仲間である目明と思われる者を隠密として派遣し、そのネットワークを利用して情報収集活動を行っている。

目明・早道といった者たちの活動は、とくに藩政史料では、彼らの活動が秘密を前提とすることから残りにくいといわれる。¹⁶しかしながら、これらの史料は、こうした者たちによる諜報活動によって情報がもたらされたように、様々な歴史的活動を背景として記載がなされている。¹⁷したがって、こうした目明などの活動を丹念に追求することができるのであるであれば、それは現在残されている藩政史料の理解をさらに豊かなものにするのではないかと考える。

註

- (1) 弘前市立図書館蔵津軽家文書「弘前藩庁日記（御国日記）」（以下、「国日記」とする）文政四年四月十日条。
- (2) 「国日記」文政四年四月二二日条。
- (3) 「国日記」文政四年五月十八日条。
- (4) 「国日記」文政四年五月三〇日条。
- (5) 「国日記」文政四年六月二九日条。
- (6) 「仙台出生嘉兵衛事喜七出訴二付及御詮議候大旨」（史料館蔵津軽家文書）

(7) 同右。

(8) 『国日記』文政四年四月十七日条。

(9) 同右。

(10) 註(6)に同じ。

(11) 「秀之進・良助并大吉・嘉兵衛等町奉行吟味回答覚写」(史料館蔵津輕家文書)

なお、この史料によれば、二人が相談したのは四月二日であるという。

(12) 註(6)に同じ。

(13) 同右。

(14) 『新編弘前市史』資料編3(近世2)九八号文書、二〇〇〇年。

(15) 註(6)に同じ。

(16) 長谷川成一「藩政史料における文書と記録」『日本歴史』四六〇、一九八六年。

(17) 同右。

(くどう・だいすけ 青森市史編さん室嘱託員)